

## 1920年代の中国美術市場と美術史学について —大村西崖の中国旅行日記を中心に—

後藤亮子（独立研究者）

本発表は、明治大正から昭和にかけて東洋美術史学の発展に寄与した大村西崖（1868–1927）晩年の中国旅行日記をもとに、1920年代中国の美術市場と、その中で美術史家西崖の果たした役割を明らかにするものである。

大村西崖は近代的中国美術史学の基本的骨格を定めた人物と言える。美術史家としてのその見識をフェノロサと対比するならば、フェノロサは『東亜美術史綱』で唐宋文化を高く評価する一方、明清以降の中国美術には唐宋文化の仲介以外の価値を認めていない。これに対して中国画論に通じていた西崖は『支那絵画小史』（1910）で明清の美術にも独自の価値があると論じた。西崖のこの観点は中村不折と小鹿青雲の共著『支那絵画史』（1913）を媒介として中国にもたらされ、1920年代以降の中国で続々と現れた中国美術史の大部分は西崖の時代区分および着想を踏襲している。また、西崖は彫塑史の大作『支那美術史彫塑篇』（1915）をまとめており、既に渡中前に日本人東洋美術史家としての立場を確かなものとしていた。

西崖の中国旅行日記は、学術的・社会的記録性の高い史料である。第一回旅行（1921）は特に学術的側面が強かったが、当時の日本の対中姿勢を反映してか公費支給は得られず、主に関西の支援者に売画して旅費を工面している。渡中後は中国人美術関係者の協力を得て所蔵家を歴訪、持ち帰った約750枚の歴代名画の写真乾板は関東関西で展覧され、中国美術の精髓を伝える役割を担った。だがその写真の著作権に関して中国側と見解の相違を生み出版が滞ったことも第二回旅行日記から読み取れる。一方、第四回旅行（1924–25）日記は激動する中国美術市場との関わりが濃厚に読み取れる内容で、西崖は美術品売買に仲介という形で関与していたことが明らかであり、のちの関西中国書画コレクションの成立にも一定の役割を果たしたものと考えられる。

西崖が念願の中国旅行で得た歴大な知見は畢生の大作『東洋美術史』（1925）として結実した。しかし西崖の中国旅行を機に陳師曾により中国語訳され出版された文人画論は、中国ではその後展開が見られたが日本では広がりを生まなかった。新文化の旗手として文人画に生命力の源泉を見出した陳に対し、教養人として典雅な伝統的文人画を理想化した西崖という個人的志向性の違いが指摘できる。また、当時中国で勃興しつつあった金石絵画について、西崖は北京や上海で接点を持つ機会を得ながらも日記や著作で積極的な評価を残しておらず、その出会いはすれ違いに終わってしまった。明清美術の良き理解者であった西崖にも受容の限界があった背景には時代的制約が指摘できるが、構造的な問題として、日中両国における書画文化のありかたの相違が根底にあると考えられる。